

作業療法の目的と見当識の概念

加藤 智也

The Purpose of Occupational Therapy and the Concept of Orientation

Tomoya Kato

抄 録

作業療法は、標準化された方法をもつ技術ではなく、活動それ自体を目的とするような実践である。したがって作業療法は専門職として同一性を保つために、作業療法固有の目的を明瞭にする必要がある。Yerxa, E. は作業療法の目的を述べるにあたり、「現実へと向かうこと (reality-orienting)」という語を用いている。本論はこの orienting の語に着目し、精神医学における見当識 (orientation) の概念を再検討した。見当識の定義には、要素的な機能を総合する機能だけではなく、より基礎的な機能についても述べられていた。

さらに本論は、生活の中で継続的に働く orienting を現象学的に理解することを試みた。人間の“向かうこと”という根源的な存在様式から、空間と場所、時間の生成について記述した。また見当識機能の基本的様相は、actual な働きであり、見当識が生み出すものは、自己、場所、時間などの動的な関係性であることを明らかにした。また現実に向かうこと (reality-orienting) という作業療法の目的は、actuality としての自己を実現して行くことであろうと考えた。

キーワード：作業療法

目的

見当識

空間と場所

時間

現実

はじめに

作業療法の目的は、広く言えば「健康と well-being の促進」¹⁾²⁾³⁾であろう。このように定義された場合、作業療法の目的は医療福祉に携わる多くの他の健康専門職と同様であり、これら専門職共通の目的となる。この同一の目的を達成するために、各専門職が個々独自の専門的な方法を用いるということであれば、目的は自明のこととなり、各専門職の関心は方法に向かうことになる。作業療法の場合、「作業を通して健康と well-being を促進する」専門職であるから、「健康と well-being」を目的に、「作業」を方法として用いる専門職であると理解することができる。

しかし作業療法において、作業は方法であると同時に目的でもあり、目的としての作業と方法としての作業を分けることが出来ない。例えば WFOT の作業療法の定義¹⁾では、「作業療法の第一の目標は、日々の生活の活動に人々が参加することが出来るようにすることである。」とし、そのために実施することとして「作業に従事する能力を高めるために人々と共にコミュニティにおいて働くこと」を例として挙げている。この場合「日々の生活の活動への参加」は目的としての作業であり、「人々と共にコミュニティにおいて働くこと」は方法としての作業と解釈することもできるが、「日々の生活の活動への参加」の中に「人々と共にコミュニティにおいて働くこと」は含まれているのであって、方法と目的の差異が不明瞭となる。

またここで方法としての作業を修飾している「作業に従事する能力を高める」という部分を目的と見なすこともできる。「健康と well-being」を広く共通の目的とし、そのために作業療法は「作業に従事する能力を高める」ことを下位の目的（目標）とするのであって、作業はそのための方法であると考えることができる。しかし「作業に従事する能力」は作業を遂行することによってのみ発揮されうるものであり、観察されるのは現実化された作業遂行であって、能力は遂行から抽象化されたものである。通常の論理に従えば、「作業に従事する能力」をいくつかの身体機能や精神機能に細分化することになるが、このような要素的な機能と機能訓練は関連するが、作業と結びつくことはない。

このような目的としての作業と方法としての作業の循環は、作業療法において避けることができない。「作業療法は標準化された方法をもつ技術ではない」⁴⁾とされている。作業療法は、技術的合理性に基づいた特有の技術を適用する専門職として同一性を保つことは困難であり、作業療法学は方法の学としては成立しない。従って作業療法の同一性を保つためには、作業療法が目的と方法を分離することのない実践であることを自覚し、実践の中にある目的を明瞭にしていくことが重要であろうと考える。このことによって、作業療法の実践は個々の対象者や状況に対応しながらも共通性を維持し、作業療法士の実践知の相互理解を可能にすると思われる。

現実へ向かうこと

Elizabeth Yerxa⁵⁾は作業療法の目的について、「私達の広い意味での目的は、クライアントの物理的環境と社会的・心理的な自己に対するその人の知覚が現実へと向かう (reality-orienting) 影響を作り出すことであり、そのことによってクライアントは自己を実現しながら自分の環境の中で働くことができるという最終的な目的に向かうことであると私は信じている。」と述べている。これに続けてYerxaは「この目的は作業療法に特有なものではない」とも言っているが、これは「自己を実現しながら自分の環境の中で働くことができるという最終的な目的」についてのことであろう。この前段にある「…知覚が現実へと向かう影響を作り出す」ということについては、作業療法士の実践に関する記述でもあり、作業療法の目的と方法が一体となった作業療法の固有性を表現していると思える。

本論は作業療法の目的を考察するあたり、特にこの「現実へ向かうこと」と訳すことができる reality-orienting という語に着目する。reality は、日常用語としては「現実」を意味するが、哲学用語としての reality は意識とは独立の事物・事象のあり方を意味する用語であり、「実在」と訳される。一方哲学用語としての actuality はなんらかの“働き”によって現実化されてある状態を意味する用語であり、「現実」と訳される。やや先取りのになるが、reality-orienting の reality は orienting という“働き”と対になった reality であるから、actuality の意味を含んでおり、「現実」と訳してよいと思う。一方 orienting は多様な意味があり、日本語に訳すことが難しい。orient の動詞は orientate と等しく「向きを合わせる」「方向を見定める」「関心を向ける」「自分の立場（居る場所）を見定める」「案内する」などの意味を持つ。われわれにとって身近であるのは精神機能としての orientation であり、「見当識」と訳されている。これに従えば orient は「見当づける」ことも含意するだろう。Yerxa の論文においても reality orientation としての説明がみられる。

見当識機能と精神医学

ICFにおける見当識機能及び精神医学との関連

ここで、reality-orienting の意味、もしくは orientate するという人間の行為、精神的な働きを理解するために、まず作業療法の臨床においても取り上げられる見当識機能 (orientation functions) について検討する。ICF (国際生活機能分類)⁶⁾において、見当識機能は、精神機能のひとつであり、「自己、他者、時間、周囲環境との関係を知り確かめる全般的な精神機能。」と簡略に定義されており、「時間に関する見当識」、「場所に関する見当識」、「人に関する見当識」などに分けられている。

ところでICFの精神機能は概して、標準的な精神医学の精神症状学に準拠している。精神医学において、例えば意識であれば、精神症状としての意識障害を明らかにすることによって、逆に本来の意識というものが考えられている。ICFの意識機能は、この標

準的な精神医学が想定する意識の概念を取り入れ、意識障害の裏返しとしての意識機能を想定していると言ってよい。

さて見当識であるが、現在の標準的な精神医学の精神症状学では、ほとんど取り上げられていない。おそらくは、さまざまな精神機能の障害の結果として見当識障害 (disorientation) が出現すると見なすために、精神症状の主要な分類項目の1つとしては取り上げられないのであろう。つまり見当識障害の出現は、意識障害、記憶障害などの徴候を示すという点で意味をもつと考えられている。例えば『現代臨床精神医学』⁷⁾で、「見当識」は主に「精神医学的診断学」の章で取り上げられ、「時、場所、人物についての見当識 orientation, Orientierung を調べる。『今日は何年何月何日何曜日か』、『ここはどこか』、『この人はだれか』などを聞き、見当識が正しい、失見当識 disoriented などの判定をする。」とあり、見当識機能への言及はみられない。確かに見当識は、精神機能を要素的に分けるときに、総合的な精神機能であると言えるだろうが、単にいくつかの要素的な精神機能を基礎に成り立つ総合的、もしくは表層的な機能ではなく、精神生活が成り立つ上で絶えず働いている根源的な機能であろうと思われる。ICF や現代の標準的な精神医学の範囲では、見当識の概念は希薄であり、ここで求められる見当識の理解には至らない。

しかし、精神医学において見当識が取り上げられている以上、その端緒においては単なる徴候以上の意味が与えられていたであろうと思われる。

Kraepelin における見当識

現代の精神医学の基礎を築いたとされる Emil Kraepelin においてはどうか。1909年に彼が著した精神医学教科書である『精神医学総論』⁸⁾において、見当識障害は「理解の障害」の1つとされ、見当識そのものは以下のように定義されている。

生活上の出来事の間断ない精神的加工の結果、われわれはその時々¹に自分の置かれている全般的状況や、その状況の過去²の出来事からの発展について、自らに対し持続的に説明可能なはずである。現在の周囲および過去との関係のこの明白さを見当識 (Orientierung) と名付ける。もちろんその際にかかわるのは、われわれの精神生活のさまざまな領域³がその生起⁴に関与している非常に複雑な精神機能である。

以上の記載から、見当識は生活上の出来事に対する継続する理解であり、自分の置かれている現在の状況を過去との関係において理解していることであることがわかる。見当識は総合的で複雑な機能ではあるが、他の精神的な働きと異なる点は、“現在を自分との関係において、生活上の出来事として理解する”ということにあり、それゆえに取⁵えてそれを見当識と名付けて取り出すのである。Kraepelin は以上の定義に続けて、すでに見当識を、「時間の見当識」、「場所の見当識」、「事物の見当識」及び「人に関する見当識」に区分している。Kraepelin のこれらに関する見解において、強調されている

点は、「現在」と「記憶」との関連であろう。そもそも彼は「あらゆる精神機能の最も普遍的な基盤は記憶（gedächtnis）である」⁹⁾と述べ、その重要性を指摘している。時間の見当識に関しては、「われわれの追想（Erinnerung）の全集積は切れ目のない列をなして整理され、その終点をなすのは現在の瞬間であり、発端部は多少とも過去に遡って広がっている。」¹⁰⁾と述べ、場所や事物の見当識に関しても、「現在」と「記憶（Erinnerung）」との関連について述べられている。

Jaspers における見当識

Kraepelin をはるかに凌ぐものと評された、Karl Jaspers の『精神病理学原論』¹¹⁾ (1913年) (以下「原論」) ではどうであろうか。

非常に複雑ではあるが調べやすい理解の作業は見当識であって、その時その時の実際の状況や周囲のことや自分のことについての見当づけである。場所の見当識、時の見当識、自己の見当識、周囲の人の見当識に分かたれる。

見当識に関しては、Kraepelin に比較してかなり簡素な説明であるが、Jaspers はこれに続けて、Kraepelin に一部従いながら、「見当識喪失」をその原因によって区分している。ここで強調されているのは、見当識喪失が「客観的に見つけやすい」ということにあり、見当識機能そのものではない。これに関しては「原論」の第5版である『精神病理学総論』¹²⁾ (1948年) (以下「総論」) においても概ね変わることはなく、徴候として見当識障害の意味をみる現代の標準的な精神医学も、これに準拠していると言えるだろう。

ただし、「総論」においては別の個所で、「原論」にはない新たな項目である「空間時間体験」¹³⁾ というものが加えられている。ここでは「空間と時間はそのものとして在るのではない」が、「存在を空間-時間的に体験することを我々は踏み越え得ない」といういわば人間の存在様式に立脚し、「体験の中における空間性と時間性そのもの」に着目する。そして空間の体験様式に関して「第一に、私の体を中心とする私の現在の見当づけによって空間を知覚する仕方、左から右、上と下、遠くと近くという質的構造をとる。」(傍点筆者) と述べられている。これは見当識が、時間性と空間性という人間の知覚の基盤を生起させているとも読みとれる重要な指摘であると思うが、Jaspers はこれ以上に見当識については述べていない。

呉秀三における見当識

わが国における精神医学の精神医療の建設者と言われる呉秀三は、Jaspers 同様 Kraepelin の影響下にあり、Kraepelin を中心とするドイツ精神医学を日本に紹介した。われわれにとって呉は、わが国に早くから作業療法を導入した人として知られる。実は、呉の著書である『精神医学集要』¹⁴⁾ (1915年～1925年) には、Jaspers が「空間時

間体験」の中で指摘した見当識の基礎的な機能について同様の指摘がある。呉は Orientierung を「指南」と訳しているが、以下は彼の「指南の障害」に関する記述である。やや長くなるがそのまま引用し、その後ろの括弧に若干の注釈を加えた。

吾人は間断なく経験を得て之を蔵蓄するものである。其経験は即ち前後相尋いで吾人の獲得となり。前の奮き経験と今の新しき経験との間には、一定の連絡があるのである。自分自己(自家指南 Autopsychische Orientierung 自身指南 Somatopsychische Orientierung)の他我現在の周囲に対し又その過去に対する関係をいつも明瞭に認知して居る。此状態を周囲指南 Allopsychische Orientierung と云う。此周囲指南力は複雑な精神作用であって、精神生活の種々の方面に関係して成立するものである。此前後奮新の経験は只継承的尋存的関係のみでなく、また広袤的並立的の関係のあるものである。それによって場所の意識と時間の意識を生ずるのである。(注釈：“Autopsychische Orientierung”, “Somatopsychische Orientierung”, “Allopsychische Orientierung”の語がある。これらは Carl Wernicke が、意識 Bewusstsein をその内容に従って、Autopsychische Bewusstsein, Somatopsychisches Bewusstsein, Allopsychisches Bewusstsein に分けていることから、呉はこれらに見当識を対応させたのかもしれない。いずれにしても Autopsychische Orientierung は「自己精神の見当識」であり、より現代的に言えば「自我意識の見当識」もしくは「自己の人格の見当識」ということであろう。Somatopsychische Orientierung は「身体-精神の見当識」であり「身体図式の見当識」を意味するのであろう。Allopsychisches Bewusstsein は「周囲の見当識」であり「外界意識的な見当識」を意味するのであろう。)

呉の記述に関して、さらに筆者なりの解釈を加えよう。まず呉は見当識を継続する“経験”を中心に説明する。経験は蔵蓄していくものであるが、現在の経験はそれに関係して奮起する過去の経験によって成立する。この精神作用には“自己精神の見当識”と“身体-精神の見当識”があり、各々“他者”と現在の“周囲”の物理的な環境との関係を導く。この2つの見当識は同時に自己精神と身体-精神にも作用してそれを導くが、人と事物を含む周囲に対する関係を強調すれば、これらを合わせて“周囲の見当識”と言うことができる。この周囲の見当識は、複雑な精神機能であって、広範な精神生活に関連する。時間的には過去と将来に関連しながら継続し、場所的にも絶えず広がりを展開する。これによって、場所の意識と時間の意識が生じるのである。

この時間の意識と場所の意識の生起に関しては、Jaspers が「空間時間体験」に通じるものがあり、見当識の基礎的な機能に言及している。実は、呉の記述は上記の引用部分に続いて、「自我の指南」、「時間の意識」(時間の見当識)、「場所の意識」(場所の見当識)の説明があるが、これらは記憶や知覚などの他の要素から説明されている。しかし上に引用した部分の呉の記述は、Kraepelin にはない見解が加えられており、呉の独創であろうと思われる。付言すれば、呉とは師弟関係にある石田昇は、呉の校閲による『新撰精神病学』¹⁵⁾(1906年)を著している。この本の中で石田は Orientierung を「所在識」と訳して説明しているが、そこには呉のような見当識の基礎的な機能に関する記

述はみられない。

存在様式としての見当識

見当識の2つの様相

前節においてICF及び精神医学における見当識の概念を検討する中で明らかになったことは、見当識機能は2つの様相をもつということである。1つは、見当識機能が記憶機能などいくつかの精神機能を基礎として成立する総合的な機能であるという様相である。これは諸家の見解に一致している。さらに見当識機能は総合的な機能ではあるが、見当識障害が、「今日は何年何月何日何曜日か」というような簡単な質問によって明らかになることから、見当識の問題はその基礎を成す精神機能障害の徴候としての意味が強調される。このとき見当識機能は他の要素的な精神機能に還元することによって説明されるため、見当識そのものの概念は希薄になる。この傾向はICF及び、Jaspers以降の現代の標準的な精神医学に明らかである。

もう1つの様相は、“見当識の基礎的な機能”としてこれまで述べてきたものである。これは、Kraepelinによる見当識の豊かな概念規定にその端緒が見られるが、Jaspersが「空間時間体験」の中で触れている見当識の働きや、呉が見当識の定義の中で述べている「周囲指南」がこれに当たる。

さて、以上の見当識の概念の検討は、作業療法の目的に関する「現実に向かうこと（reality-orienting）」を明瞭に理解することを目指していた。orientingという語は、見当識（orientation）よりも、それが継続して働いていることを強調しているように思える。従って以下においては、生活の中でより継続的に働くorientingを現象学的に理解することに努める。またそのことによって、上記の見当識の2つの様相区分を捉え直すことが出来よう。

向かうことと身体の方角

見当識を固定的な能力とするのではなく、人間の生活の中で実際に働いている“オリエンテートすること”と“オリエンテートされること”、つまりorientingを、経験に基づいて反省するとき、そのもっとも根源的な在り方は、何かに“向かうこと”であろう。これは世界の内に存在する人間の存在様式を示している。人間は生活の中の遂行において絶えず、どちらかの方へ向かうように姿勢を取り続ける。つまり身体の前面をなにものかに向け、そして向き直りどちらかの方へ向かう。この“方へ向かう”もしくは身体を“向ける”“向け直す”ということは、“方向を定める”ことである。人間はある方向に進み、ある方向に手を伸ばす。

人間の世界との関係におけるorientingが、“方向を定める”ことであると言うとき、その方向が結ぶ関係性は、空間の中で点と点を結ぶ直線的で静止する関係ではなく、一方へ進行する動きそのものを示している。方向とは動性の傾向であり、方向という語の中にすでに定めるという働きが含意されている。つまり“方向を定める”は、“方向づ

けること”であり、その”傾向”を、精神的な作用として捉えると、概ねという意味を含み、“見当づけ”になる。

人間と世界との関係におけるこのような方向性について、身体の在り方に着目することは、呉の言う「自身指南」(Somatopsychische Orientierung: 身体-精神の見当識)の捉え直しにつながる。人間は“自ずから”^{おの}重力によって下へ方向づけられており、身体-精神は“自ら”^{みずか}それに抗して上を志向して身体自身を方向づけている。つまり上下方向を指標として身体諸部分は位置付けられて姿勢を保つ。それと同時に身体は、重力への反作用をもたらす地平面、つまり上下方向に垂直な水平面という広がりを与えられる。人間は上下方向に姿勢が整うとき、水平面での自由な活動性を獲得する。

水平面での方向性を考えるとき、人間は自身を中心として前方というものを持っていないわけではない。なぜなら、前面を持たない事物が水平面を一方に進行するとき、進行する方向を前方とすることによって、はじめてその事物にとっての右と左という方向性の差異が生じるからである。単なる事物は静止するとき左右という方向性は生じない。人間は“自ずから”身体の形態によって“前面”を与えられている。つまり人間は前方へ方向づけられている。

意志と空間

身体の前方は、精神生活(生活の中における精神性)からすれば、人間の“意志”の萌芽が向かう方向でもある。“向き直る”ことは、自らの身体の前方を向け直すことであり、そこに意志が反映されて、人間は外界の前方に自己を写す。前方は自らが向く方向であり、意志を象徴する。人間が自ずから有する外へと向かう勢いは、上下方向に姿勢が整うとき、前方へと向く。意志は姿勢を正して前を見据えるという行為の精神性である。

また、“向き直る”ことにおいて、左右の方向性は主観性を象徴する。つまり左右の方向性は自らの意志に従って開かれていく方向性であり自由に移ろい広がる空間性となる。また2人の人間が向き合うとき互いの人間にとって他者は前方に存在するが、互いに右方向と左方向は逆を向く。さらに2人の人間が同じ方向を向くときに、右方向と左方向は互いに一致するが、“私”にとって他者が左に存在するときに、他者にとって“私”は右に存在する。このとき“私”の左方向にある左手の位置と他者の右方向にある右手の位置が重なる。つまり左右の方向性は、絶えず“私”にとっての方向性でしかないこと、意志の中心つまり自らの行為の主体と、空間の広がりを中心とする主観が1つに在ることを反映する。

一方、上下の方向性は客観性を象徴する。上下の方向性は、意志の方向である前方がどこを向いても、移ろうことなく一定である。私の上方向と他者の上方向は、互いにどこを前方としても一致する。つまり上下方向は、絶えず他者と共通の空間性を反映するがゆえに客観性を象徴する。

以上のように、人間は自ずから上下方向と水平面をオリエンテートされ、自ら前方を

オリエンテートすることによって、客観的であると同時に主観的である空間性の意識が生起すると言えよう。人間が経験する空間性は、言わば原点のない座標と視点を持つ視界が融合していると表現できる。以上の考察は、Jaspers が述べた「空間の体験様式」に関連するだろうし、呉が述べた見当識による「場所の意識」の生起ということにもつながるだろう。

経験と時間

精神生活において方向は、直線的ではなく、前方もしくは意志の向かう概ねの見当である。orienting は進行中であることを示しており、現在の経験の中で修正しつつ進んで進むことを意味する。自ずから生じる生命体を持つ外への勢いは、原点を持つ座標空間の1点に向かうような方向性を持つのではなく、つまり外在する固定的な指標や目標へ向かうのではなく、進行することに本質がある。

このような進行は、自己の置かれている位置を空間における点のようにではなく、有意味な広がりをもった場所として現前させる。この進行する現在は、そこから脱け出て“どこかへ向かう”という将来を含んでいる。もしくは、現実に向かうこと (reality-orienting) は、“将来”に向かうことによって、“現在”の空間が有意義性を帯びて場所になることである。経験しているということは、自己が現在に開かれているということであり、このような自己が現実化するためには、「あったがままのおのれに立ちかえって、それを引き受けなおすこと」¹⁷⁾によってでしかない。つまり経験している現在において、“過去”の自己の経験は自ずから現在へと呼び起こされる。

このような時間性に関連して、木田¹⁸⁾は Martin Heidegger の「根源的時間性」¹⁹⁾を表わす sich zeitigen を、「おのれを時間化する」「おのれを時間として生起せしめる」と訳している。また呉が言う見当識による「場所の意識」と「時間の意識」の生起とは、このような事態を言っているのであろう。さらに「自家指南 (自己精神の見当識)」と「自身指南 (精神-身体の見当識)」は、“過去”に対する関係をいつも明瞭にして、“現在”の周囲を認知しており、これを周囲指南 (周囲の見当識) と言ったことも肯ける。見当識の現象学的な考察は、「世界を経験する生の生動性」「生き生きした現在」²⁰⁾への問いに通底する。

おわりに

以上の考察から、見当識機能はその基本的様相において、進行する actual な働きであり、見当識が生み出すものは、自己、場所、時間などの動的な関係性である。見当識は現在の現実を理解する働きでもあるが、それは外在する real な指標を知っていることではない。精神医学的診断において「今日は何年何月何日何曜日か」、「ここはどこか」、「この人はだれか」などを聞き、それに客観的な指標を答えること、つまり正確な日付や住所や名前を答えるという問答は、本来の見当識機能とはなんら関係がない。これら質問は見当識障害の表面的な結果を引き出すことができるということであり、日

付、住所、名前などを知らない場合でも、見当識機能を働かせて現実を理解し、行動することはできる。

見当識機能は、極めて actual な働きであり、自己、場所、時間などの動的な関係性である。しかし多くの人間にとって自己へと立ち還り、現実に向かうことはたやすいことではない。自己の行為は、外在する客観的指標を頼りに遂行され、自己は自らを物象化して世界の中に位置付けている。作業療法が actual な実践であるとき、作業療法の目的は、外在する客観的な目標に墮してはならない。

現実に向かうこと (reality-orienting) という作業療法の目的は、actuality としての自己を実現して行くことであろうと思われる。Adolf Meyer²¹⁾は、1922年に「人間の想像力と先見のともなった時間の使用」は「過去と現在を一致するように実感する (appreciation) ことに基づく」と述べ、作業療法は、「actual な時間」「時間の真の意味を自覚すること」であると述べている。今回の論述を通して、筆者は100年近く以前に書かれた Meyer の至言へ向かっていることに気づかされるが、未だ遠く及ばないことを幸いとしなくてはならない。

註

- 1) WFOT : World Federation of Occupational Therapists : What is Occupational Therapy? 2010. (<http://www.wfot.org/information.asp>) 2010.10.30.
- 2) Letts, L. : Health Promotion. In : Crepeau, E. B. et al : Willard & Spackman's Occupational Therapy, 11th ed, pp 165-180, Lippincott Williams & Wilkins, 2009.
- 3) Christiansen C. H., Baum C. M. : Occupational Therapy -Performance, Participation, and Well-Being-, SLACK Incorporated, 2005.
- 4) Canadian Association of Occupational Therapists : Enabling Occupation -An Occupational Therapy Perspective, Revised Edition, p.5, CAOT publications ACE, 2002.
- 5) Yerxa, E.J. : Authentic Occupational Therapy. American Journal of Occupational Therapy, 21, pp 1-9, 1967.
- 6) 障害者福祉研究会 (編) : ICF 国際生活機能分類 - 国際障害分類改定版 -. pp 58-59. 中央法規出版, 2002.
- 7) 大熊輝雄 : 現代臨床精神医学 改訂第10版. p 128, 金原出版, 2005.
- 8) Kraepelin, E. (著), 西丸四方 他 (訳) : 精神医学総論. pp 69-73, みすず出版, 1994.
- 9) 同書, p 60.
- 10) 同書, p 70.
- 11) Jaspers, K. (著), 西丸四方 (訳) : 精神病理学原論. pp 129-132, みすず出版, 1971.
- 12) Jaspers, K. (著), 内村祐之 (訳) : 精神病理学総論 上巻. pp 262-265, 岩波書店, 1953.
- 13) 同書, pp 119-134.
- 14) 呉秀三 : 精神病学集要 上. pp 120-124, 創造印刷, 1974.

- 15) 石田昇：新撰精神病学. pp 55-56, 創造印刷, 1977.
- 16) 竹内整一：「おのずから」と「みずから」—日本思想の基層. 春秋社, 2004.
- 17) 18) 木田元：ハイデガー. p 92, 岩波書店, 1983.
- 19) Heidegger, M. (著), 桑木務 (訳)：存在と時間 (下). p 56, 岩波書店, 1963.
- 20) Held, K. (著), 新田義弘 (訳)：生き生きした現在. p 1, 北斗出版, 1997.
- 21) Meyer, A: The Philosophy of Occupation Therapy. Archives of Occupational Therapy, 1(1), pp 1-10. 1922.

Abstract

Occupational therapy is not a technique with standardized methods, but a practice that has its purpose within the activity. Hence, we must articulate the unique purpose of occupational therapy to identify the profession of occupational therapy. Yerxa, E. used the term “reality-orienting” when she stated the purpose of occupational therapy in her famous lecture. Focusing on the term “reality-orienting”, this article reviews the concepts of orientation in psychiatric studies. These studies have defined orientation as not only the functions organizing the various factors, but also the fundamental functions.

In addition, this article attempts the phenomenological understanding of orienting as continuous functions in our lives, and states that one of the fundamental forms of being human is directing “toward” something, as well as generating time, space, and place. The fundamental aspect of orientation functions is an actual movement. Therefore, a dynamic relationship to self, place, and time comes out of those orientation functions. The purpose of occupational therapy as “reality-orienting” will be the continuous self-fulfillment as actuality.

Keywords : occupational therapy

purpose

orientation

space and place

time

actuality